議事録

平成 24 年度文部科学省地域イノベーション戦略支援プログラム

運営委員会

日　時：平成 24 年 10 月 19 日(金)10:00～12:00

場　所：東北大学　青葉記念会館　401

参加者：18 名

議事：

●開会　(10:00-10:05)

中塚勝人プロジェクトリーダーより挨拶があった。

●進捗状況報告　(10:05-10:20)

宮本明研究推進委員長よりこれまでの活動内容の報告があった。

・7/12(木)　拡大運営ボードミーティング・拡大全体会議

正式な発足を受け、午前には協議会・委員会等の紹介、午後には今後のプロジェクトの動きについて議論した。プロジェクトに参加している約 40 の研究室のほぼすべてに出席頂いた。

・8/22(水)　人材育成プログラム・研究設備・機器等共有化プログラム説明会

こちらの説明会にもほぼすべての研究室に出席頂き、企業の方々に向けてそれぞれの研究内容を紹介してもらった。研究室ごとの発表内容は HP にもアップしており、随時確認できるようにしている。岩手県の次世代自動車プロジェクトの方々にも参加頂いた。

・9/7(金)　発足会議

文科省・宮城県・岩手県・大学に加え、多くの企業の方に参加頂き、全体として約 250 名の盛会となった。このプロジェクトでもっとも重要である地域企業の方に、記念講演として地域企業の現状、このプロジェクトに対する思いなどをお話し頂いた。また、プロジェクト紹介・研究紹介を通して、大学・県の持つ次世代自動車へのポテンシャルも地域企業の方々にお知らせできたのではないか。

・9/21(金)～9/26(水)　ラボツアー

企業の方々に大学での研究を肌身で感じて頂くために、40 の研究室を実際に見学した。のべ 100 名ほどの参加があり、それぞれの研究室の持つシーズを知って頂けたと思う。

●今後の予定　(10:20-10:30)

宮本明研究推進委員長より今後の予定が発表された。

●事務連絡　(10:30-10:35)

事務局　野崎さくら氏より、当初は研究室を 16 分野に分けていたが、細かすぎるので 5 分野へ分け直して進めることにしたとの連絡があった。

●意見交換　(10:35-11:50)

・中塚勝人プロジェクトディレクター

プロジェクト自体は順調に進んでいるものの、実際に研究室に興味を持ち、働きかけてくるような中小企業をもっと増やしていかなければならない。大企業の方から、「中小企業は資金の問題もあり、大学との共同研究は難しいのでは」との意見を頂いたこともある。大学側から地域企業に強く働き掛けることが大切。また、大学の技術シーズと企業のニーズのマッチングを実現させるために、知のネットワークの構築も進めていきたい。宮城県エリアでは大学シーズの強化・連携、岩手県エリアでは中小企業のレベルアップが強みとなっているようだが、それぞれの強みを結び合わせ、補強していけるのが理想的。

・八戸工業高等専門学校校長　岡田益男氏

中小企業が相談できる窓口を大学に作るべき。企業にとっては機密保持の観点から、簡単には話せない問題もある。また、中小企業には研究員がおらず、共同研究には費用が発生するため、東北大学は敷居が高いと感じている。今後の自動車業界は、長期ビジョンで見れば電気自動車よりも燃料電池自動車に重点を置いていくのでは。

⇒宮本明推進委員長：大学では産学連携本部があり、企業との窓口の役割を担っているので、積極的にご協力頂けるようにしたい。

⇒岡田益男氏：HP に載せる等、企業に窓口の存在をアピールしてほしい。

・宮城県自動車産業振興アドバイザー　佐藤宏毅氏

地域企業にとってはやはり東北大学は敷居が高いイメージがあるが、今回のプロジェクトでそのイメージを払拭してほしい。広島では大学コンソーシアム・企業ニーズの専任コーディネータがおり、強いリーダーシップを持っている。広島をベンチマークに、このプロジェクトも進めていければいいのではないか。

⇒中塚プロジェクトディレクター：宮城県エリアでは地域企業の声を吸い上げるために、アドバイザリーボードに地域企業の OB の方を置いている。岩手県エリアでは委員会に直接企業の声が伝わるため、アドバイザリーボードは必要ないとの話を聞き、我々も見習わなければ、と感じている。

・東北イノベーションキャピタル株式会社取締役　高橋四郎氏

大学側が提供するシーズと企業ニーズをうまくかみ合わせていけるのか、時代と共に変化していくニーズに対応していけるのかがポイントになる。特許や機密問題も扱わなければならない。企業と連携するための仕組みを作ることで有識者を動かし、リスクマネジメントにも対応していければ今後のプロジェクトの成功につながるのではないか。

・ジーディーキューブコンサルティング代表　吉村達彦氏
今はそれぞれの思惑に沿って独自に進めているようなイメージがあるが、何がどのように絡んでいくことでうまくいくのか、シナリオ作りをするべき。今後の自動車産業が電気自動車に進むのか燃料電池自動車に進むのかは、地元企業にとって重大な問題ではなく、その流れの中に会社の仕事はあるのか、どうなっていくのかが重要であるはず。
・宮城県自動車産業振興アドバイザー　佐藤宏毅氏
このプロジェクトのお客様は地元企業。広島の例では、シナリオ作り・ブレイクダウン・中小企業でも実現可能なレベルへの落とし込みがしっかりできている。大企業が自社でやらないことを地元の中小企業に落としており、ネットワークが上手く出来上がっている。広島の例から学びたい。
・東北大学　一ノ倉理教授
モーターの研究をしているので、燃料電池自動車・電気自動車どちらにも対応できる。だが、燃料電池・電気自動車どちらも高額になってしまうこともあり、あまり普及していないのが現状。
・宮城県産業技術総合センター所長　伊藤努氏
企業での経験も踏まえて考えると、このプロジェクトの中での地元企業の立場や役割、身の置き所をさらに明確にさせていきたい。産業界、大企業は地域企業に何を求めているのか、そのためにはどのように活動すべきかをリサーチし、こちら側から地域企業に提案していく形もあるのではないか。
・東北イノベーションキャピタル株式会社取締役　高橋四郎氏
広島でプロジェクトマネージャーを務めていた。何社かで一つの仕組みを作るコーディネータの役割を広島では産業振興機構が担っていたので、宮城でも県や経産局の協力は不可欠だと感じている。
・ジーディーキューブコンサルティング代表　吉村達彦氏
広島では大学教授も枠にとらわれず、企業との間に壁を作っていなかった印象があり、東北大学の教授にもそのような姿勢でプロジェクトに参加してほしい。
・宮城県産業技術総合センター部長　古川博道氏
地元企業が相談しづらいというお話があったが、産業技術総合センターでも地元企業の声を吸い上げるために積極的に相談を受け、窓口の一つとして協力していきたい。現在はラボツアーで紹介された大学のシーズをどのようにニーズに合わせていくのか、落とし込んでいる。
・宮城県自動車産業振興室主幹(班長)　平塚勝徳氏
地元企業がこのプロジェクトにどのように関わってくるのかが重要。どうすれば参加しやすいのか、どんなニーズがあるのかを的確に掴み、大学との連携を進めていきたい。
・八戸工業高等専門学校校長　岡田益男氏
プロジェクトの評価方法に関して、顧客の満足度を調べる方法も有効だと思う。具体的

には、講義等の後にアンケートを取り、参加者の意見を調査する。次回への参加希望等、参加者の生の声として貴重な意見を頂ける。

●閉会　(11:50-12:00)

中塚勝人プロジェクトリーダーより挨拶があった。